

～宮津のまちは百花繚乱～ 特別展 清輝楼 小さなちいさな美術館」

『江戸時代の宮津は京都の一流絵師が活躍するまさに百花繚乱の時代だった。』この歴史的事実を広く知らしめるために今回このような企画展が開催されました。

江戸時代後期、文化文政年間、明治にかけて円山派、四条派などが多く宮津にて活躍しましたが、その多くが清輝楼と深い関わりをもっていました。今回寺町の文化財と合わせて、普段お見せすることがない清輝楼秘蔵のお軸などをお目にかけます。展示内容は順番に変えて行き、それぞれお見せしたいと考えています。お楽しみに。

なんととっても庄巻は智源寺にある二十名の流行絵師の天井画です。

そのコーディネーターである岡本豊彦のお軸をご覧ください。

岡本豊彦 群鴨



岡本豊彦（おかもと とよひこ）安永二年（1773）～弘化二年（1845）年。倉敷の富裕な旧家・岡本家の庶子。十代半ば、玉島の南画家・黒田綾山に師事。大阪へも往来し、山水を中心に作画。寛政八年には上京して呉春に入門していることが東山新書画展観への出品から確認される。享和元年、大津祭の曳山に鳳凰図を描き、文化三年に妙法院真仁法親王の法要に「花卉図」五幅を景文・義董と共に奉納。これ以前は呉春風に描いた花鳥・人物などの作例も多い。円山派の勢力が衰え、時流が四条派に傾いた、文政期以降は量産系の山水画が目立つ。文政度東本願寺御再建では御玄関と小寝殿の襖絵、白書院遣戸、寝殿杉戸を担当。書画展観へは弘化二年の恩田石峯主催の展観まで計八回出品。寄合描きへの揮毫も多い。人柄の良さで画壇の中心的な存在となり、画塾・澄神社を主宰し、門弟を多く抱える。

土佐光貞 高砂 三幅対



土佐光貞（とさ みつさだ）元文三年（1738）～文化三年（1806）土佐光芳の次男。本家とは別に一家を立てる、禁裏絵所領となる。宝暦四年に従六位下、内膳大属、同十一年に正六位下、同十三年に大允、明和元年に左近将監、同五年に従五位下、安永四年に従五位上、土佐守、天明二年に正五位下、寛政四年に従四位下、享和二年に従四位上に叙せられた。明和元年、同八年、天明七年などに大嘗会悠基屏風を制作。寛政度御所造営においては清涼殿に障壁画を描く。西本願寺辰章殿に「浜松図」天袋貼付、天寧寺に勝山琢舟との合作「歡喜心院図」を残す。墓所は智恩寺。（左京区田中門前町）